

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

平成30年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を
目的として、平成 30 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した
者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	小見山 和栄		
学位の種類	博士（言語文化学）		
学位記番号	甲第18号		
学位授与の日付	平成31年3月15日		
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当		
学位論文題目	日本人高校生のライティング力の発達における エクステンシブ・ライティングの効果に関する 実証的研究		
論文審査委員	主査	教授	鈴木 寿一
	副査	教授	吉田 真美
	副査	名誉教授	金谷 憲（東京学芸大学）

論文内容の要旨

本研究は、「言語はコミュニケーションの道具であり、外国語教育の目的の一つは、外国語を道具として利用するために必要な技能を生徒が習得することを手助けすることにある」と本研究の執筆者・小見山氏は考え、コミュニケーションの道具としての観点から4技能の一つであるライティングの力を伸ばす指導法の一つを提案しようとしたものである。

第1章では、高等学校における英語ライティング指導がこれまでどのように行われてきたかが最初に述べられている。続いて、文部科学省の調査（2012）から、まとまった英語を書く経験がある高校生は50%以下であり、ライティング力がCEFRのA2レベルに達している高校生は19.7%で目標値の50%に達していないことを引用し、まとまった長さの英文を書く指導を高校生に対して行う必要性を主張している。そして、生徒が書いた作品を読んで、英語の誤りを訂正するだけの時間的余裕が教員にないことが、まとまった英文を書く指導が行われない最大の原因と考え、その原因を取り除くことが可能なライティング指導として *extensive writing* を提案している。

第2章では、ライティングの指導のうち、*extensive writing* を研究対象とした理由として、①大量に読むことでリーディング力だけでなく、総合的な英語力を伸ばすことを可能にする *extensive reading* に着目し、同じことが大量に書く *extensive writing* でも可能になるのではないかと考えたこと、② *extensive writing* は英語をコミュニケーションの道具として使うライティング活動として有意義であること、③1文単位の和文英訳中心のライティング指導を改善するのに *extensive writing* が貢献できるのではないかと考えたことなどが挙げられている。最後に、本研究の研究課題として、1) *extensive writing* は日本人高校生にとって有益か、2) *extensive writing* によって、生徒が書く英語がどのように変化するか、3) 英語の誤りを指摘しない *extensive writing* が生徒が書く英語の正確さに悪影響を及ぼさないか、という3点が挙げられている。

第3章では、第二言語教育及び外国語教育におけるライティング指導に関する先行研究のうち、特にライティング指導の問題点・評価と分析の方法、フィードバックの方法、指導効果に関する内外の研究を紹介している。特に、フィードバックの方法について、学習者が書いた文章中の文法や

語法の誤りを訂正することの効果、学習者が書いた文章の内容に対して教師が質問したりコメントしたりすることの効果に関する内外の先行研究をまとめている。

第4章では、extensive writingの効果に関する先行研究のレビュー後、高校3年生を対象に実施した指導実験がまとめられている。毎週、教科書の exercise から文法問題の小テストが行われた対照群に対して、処置群には 10-minute writing が行われた。年度当初は英語力において両群間に差はなかったが、学年末考査で、「土曜日に授業することに関して賛成か反対か」について英語で書かせ、英語母語話者による 10 段階の総合評価に加えて、流ちょうさの指標として、生徒が書いた英文の総使用語数、異語数、一文当たりの使用語数の平均、使用した文法パターンを日本人教員が調べた。その結果は、英語母語話者による総合評価の平均点は、処置群は対照群に比べ有意に高く、総使用語数、異語数、一文当たりの使用語数においても、対照群を有意に上回ることがわかった。しかし、文法形式の使用頻度は、両群の間に差はないことがわかった。

第5章では、文法訂正のフィードバックの効果に関する先行研究のレビュー後、誤りの訂正を一切行わない 10-minute writing を行った生徒が、10-minute writing を行わなかった生徒に比べ、文法的正確さや定着という点で劣っているかを検証した。281 名の高校1年生を、2 学期に 11 回の 10-minute writing を 10 分を行ったグループ A、同期間に 12 回の復文練習を行ったグループ B、10-minute writing を 5 回行い、復文練習を 6 回行ったグループ C、これらの活動のどちらも行わず、文法規則の説明と練習問題の答え合わせと解説が中心の授業を受けた D グループの 4 つのグループに分けて実験が行われ、その指導の成果を、9 月と 3 月に受験した GTEC for Students における文法点の平均点を用いて分析が行われた。その結果、文法点の平均は、4 グループとも上昇したが、グループ B とグループ D よりも、グループ A とグループ C が向上していることがわかった。すなわち、文法訂正フィードバックなしでも、10-minute writing は文法の正確さに悪影響を与えることはなく、むしろ文法の正確さは、10-minute writing を行ったグループ A とグループ C が、10-minute writing を行わなかったグループ B やグループ D を上回っていたことを報告している。

第6章では、10-minute writing が学習者の流ちょうさに及ぼす影響を調べている。過去のライティングにおける流ちょうさに関わる先行研究をまとめた後、第5章と同じ4つのグループの生徒たちに対して、What do you want to be when you grow up?というタイトルで 10 分間、英文を書かせ、4 つのグループの各生徒の総語数、文数、1 文当たりの語数を調べ、さらに、ALT による総合評価を統計処理して、4 グループ間の差を調べた。その結果、10 minute writing を行ったグループ A と 10 minute writing と復文練習を行ったグループ C が、10minute writing を行わずに通常の授業に加えて復文練習を行ったグループ B と通常の授業のみのグループ D を流ちょうさにおいて上回ったことが報告されている。

第7章は、ケーススタディで、本研究の参加者の内 6 名の生徒が書いた英文を分析して、ライティング力の変化を調べている。段落構成、文章展開についての全般的なコメントと、明示的な文法訂正と語彙に関してフィードバックを受けた 2 名の生徒は、文章構成、流暢さ（総語数、異語数、1 文の長さ）も向上していることがわかった。他の 4 名は、文法訂正に関わるフィードバックは受けなかったが、流暢さが上昇する傾向が見られた。ほかにも、6 名に共通してみられた傾向として、複雑な文構造の使用ができることを示す前置修飾と後置修飾の使用回数も上昇していることが報告されている。

第8章では、必要と考えられてきた教師による添削指導がなくても、生徒のライティング力は伸びるという本研究の結果から、10-minute writing の実用性、10-minute writing が授業中の小テストよりも英語力向上に有効に働く可能性があること、多くの英文を書くことは英文の質の向上につながることを主張されている。また、従来のライティング指導の中心であった和文英訳から、授

業中に行う 10-minute writing のほか、家庭学習で行う extensive reading と合わせて book report を英語で書かせたり、ライティング・マラソンなどを課したりすることで、生徒が書く英文の量を増やすことを提案している。

最終章の第 9 章では、本研究の問題点として、研究の参加者数が少なかったこと、参加者数が少なく、学力群別の分析ができなかったため、どの学力層の生徒にとって 10-minute writing が最も効果を発揮するかについて分析することができなかったことなどが挙げられている。「正確さ」については、エラーのない T-unit の数を比べるなど、「正確さ」における変化を比較していないこと、本研究で行ったライティング指導が、他の技能にどのような影響を与えたのかが調べられていないなども問題点として挙げられている。今後の課題としては、アウトプットに先立って、語彙や文法の知識を得るインプットをどのように行うかを明らかにする必要があること、extensive reading との組み合わせや、教科書の各課の本文の内容に関連したトピックについて書かせること、ライティング活動に関連付けて、流暢さ、正確さ、コミュニケーション能力をどのようにして伸ばすかを研究することなどが挙げられている。

口述試問及び審査結果

審査委員 3 名から出された多数の質問とコメントの内、主なものは以下の通りである。①正確さや流ちょうさの量的研究は 2014 年度までの実践から得られたデータで、10-minute writing の実践がそれ以降も続けられているのに、2015 年度以降のデータがないのはなぜか？②もっとたくさん生徒に書かせた場合に、正確さや流ちょうさがどのように変化するかを調べるために、10-minute writing の他に、「コミュニケーション英語」の各課の本文の内容に関する推論発問や評価発問に対して英語で答えを書かせる実践が現在行われているが、博士論文修正期間中に、この実践から得られたデータを分析して加筆することは可能か？③先行研究として、日本人英語学習者を対象にしたフィードバックの効果に関する代表的な研究のうち、触れられていないものが少しあるので加筆しておくこと。④「日本人英語学習者は間違いを恐れるために英語が書けない」という意味のことが論文中に書かれているが、そのように考える根拠は何か？⑤④に関連して、誤りを恐れて書けないのではなく、必要な語彙や文法が未習得であるために書けないことが多いのではないのか？⑥与えられたテーマについて書く 10-minute writing は 4 技能を統合した活動とは言えない。⑦ライティング指導における extensive writing の位置づけは？⑧第 5 章は extensive writing の文法への影響がメイン・テーマであるはずだが、実際にはそれ以外の点も分析されているので、第 5 章は文法に絞って、他の点は別の章を立てて記述した方が論点が明確になる。⑨統計処理方法は適切だが、正規分布の検定結果の解釈が間違っている。⑩多重比較を行った場合は、通常は有意となる $p < .05$ を、比較を行った回数で割って有意確率を出すべきである。⑪有意確率は、単に差が偶然生じた確率を示すもので、効果の差を示すものではない。従って、効果量によって差があるかどうかを判断すべきである。⑫extensive writing の普及を考えると、10 分間ライティングよりは 5 分間あるいは 3 分間ライティングの方が時間を捻出しやすく無理がなく、また 1 回当たりの時間を短くすることで練習の頻度が上がり、効果もある。⑬従来型の指導とはどんな授業なのか？⑭復文練習とはどんな練習か？⑮復文練習や 10-minute writing 以外の残りの時間はどんな指導が行われているかを記述しておくべき。⑯第 7 章のケース・スタディで分析対象の生徒の作文はなかなかよくできている。もっとできない生徒を選んで分析した方が、extensive writing の効果が明確に出たのではないのか？⑰たくさん書かせることで流ちょうさが向上することは誰も批判しないので、むしろ、添削指導なしでも、たくさん書けば正確さが向上することに的を絞ったほうが、説得力があるのではな

いか？⑱自己表現というのは、狭義には自分のことを表現することだが、実際の言語活動は、聞いたり、見たり、読んだりしたことを人に伝えることがよく行われる。それらは広義の自己表現と言えるし、立派なコミュニケーション活動である。それならば、英語でアウトプットする力を伸ばすためには、教材内容を繰り返し聴いたり読んだりして理解したあと、あるいはさらに音読などのインテイク活動を行ったあと、リテリングさせるのも有効である。また、添削不要という意味でも、リテリングの方がライティングよりも多忙な教員にとって気軽に取り組めるし、アウトプットの力も伸びる。⑲ライティングの認知メカニズムやプロセスについても記述が必要ではないか？

以上の質問やコメントに対する回答の中には、不十分と思われる回答もあったが、概ね、適切な回答がなされた。

本研究の優れた点は、①日本の英語教育では、受信力とともに発信力の育成が強く求められているにもかかわらず、発信力の育成のための指導に取り組んでいる英語教員は一部である。しかし、本研究は、多忙な校務をこなしながら、つねに生徒のことを考え、手間のかかる実践と研究に長期間取り組んだことから生まれた研究であること、②生徒のライティングによる発信力を育成するために、海外では盛んに実践されているが、日本ではまだ実践者が非常に少ない *extensive writing* を長年にわたって実践し、優れた成果を上げていること、③たくさんのデータを集めて、*extensive writing* の正確さと流ちょうさに対する効果を、量と質の両面から明らかにしていること、④本論文で今後の課題となっていることについて、既に取り組みが始まっていること、⑤実際の生徒が書いた英文や Appendix として付けられた資料が豊富で、実践をイメージしやすいこと、⑥今後の英語教育が目指すべき方向に沿った手堅い研究であることの6点である。

高く評価できる本研究にも、改善すべき点や課題はある。改善すべき点としては、①章によってセクションのタイトルの付け方が異なっているところがあること、②図や表にタイトルが付けられていないものがあること、③ライティングと他の技能あるいは総合的英語力との関係については触れられていないこと、④分析結果に対して考察が不十分あるいは不適切な箇所が数カ所あること、⑤統計処理を行って有意確率は記載されているが、効果量が抜け落ちている箇所があること、⑥本文で参照されている文献が参考文献に挙がっていないものがあること、⑦参考文献の表記法が統一されていないこと、などがある。しかし、これらについての加筆や修正は、難しいことではないと考えられる。

本論文の最後に挙げられている今後の課題のほかに、3年間にわたって *extensive writing* の指導を続けること、そして、その結果、日本人英語学習者が書く英語にどのような変化が生じるかを明らかにすることが今後の課題となるであろう。

上で述べたように、本論文には改善すべき点や今後の課題もあるが、本論文の価値を低めるものではない。また、「英語授業で大切なことは、生徒が表現したいことを表現できる技能面の指導だけでなく。生徒一人一人に寄り添う教師の姿勢が最も大切である。それが生徒と教師の望ましい人間関係を築き、生徒の英語力を向上させる。その点でも本論文の執筆者である小見山氏の実践は成功している」ということは、審査委員全員の一致した感想である。本論文は、日本の英語授業の改善に大きく貢献すると思われる。さらなる実践と研究を期待したい。

審議の結果、審査委員全員一致で、本論文が「博士（言語文化学）の学位に値するものである」と判断した。

以上